
土塊故郷行

みなきゆきなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土塊故郷行

【Zコード】

Z0467Z

【作者名】

みなきゆきなみ

【あらすじ】

様々な種族が共生する世界。

故郷を失ったヌシ・白狼と、彼の民であつた娘・ウズメは、新しい故郷を探し、大陸を旅していた。

故郷の最後の民の幸せを願う、白狼の旅路の行方は、果たして。
(サイトと同時掲載)

プロローグ 咆哮

母なる山が咆哮した。

地を突き崩すような震動が、白狼の住処である小さな祠を襲つた。轟音が白銀の体毛を震わせる。預かつてゐる赤子を口の使いであるオキナに任せ、白狼は石造りの鳥居の下に飛び出していた。

この数日降り続いている、針のような冷たい雨が、白狼の巨躯を容赦なく打ち据える。鬱蒼と木々が生い茂るこの場所からは、白狼がヌシとして治める里の様子は見えなかつた。

嫌な胸騒ぎが納まらなかつた。

駆けた。ぬかるんだ山道が足先を冷やして感覚を奪い、はじけ飛んだ泥が美しい毛並みにこびり付いた。年老いた体は軋み、肺は酸素を求めて悲鳴を上げる。見開き、風に晒された鋭い瞳は、知性を持たぬ肉食獣のように血走つていた。荒い呼吸と共に、縋り付くような唸り声が鋭い牙の隙間から漏れる。

白狼が目指す先には、里を一望出来る切り立つた崖があつた。ようやくの思いでそこに辿り着いた白狼は、警鐘のように激しい鼓動を落ち着けようと一つ息を吐いた。そして徐に首をもたげ、眼下の里を望もうと瞼を開く。

しかし、彼の知る里の姿は、そこにはなかつた。

視界に入つたのは、里を呑み込んで唸りを上げる土色の濁流、ただそれだけだつた。

戦慄する。体の冷えを唐突に意識した。瞬きを忘れた瞳が乾き、ちりちりと痛んだ。定まらない瞳孔が小刻みに震える。覚束ない呼吸が口元から漏れる。

里は、

里の者は、どうなつた。

無謀にも飛び出そうとする前脚を、辛うじて理性が制止した。眼下で重く轟くような声を上げる土石流が、木々を岩を家を土を生き

物を、全て蹂躪して押し流していく。

白狼は吼えた。腹の底から沸き上がるような、体内に渦巻く感情を吐露するような、重く沈痛な慟哭だった。その巨大な躯体を冷雨の下に晒し、白銀の毛皮を泥土に染めて、振り絞るように白狼は嘆つた。　されど、そんな悲痛に塗れた声を、濁流は容赦なく呑み込んでいく。

白狼は悔いた。大いなる自然を前にただ立ちつくすことしか出来ない、己の情けのなさを悔いた。どんなに声を張り上げても轟音に押し流されてしまう、己の小ささを悔いた。愛した里人を救うことの出来ない、己のあまりの無力を悔いに悔いた。

衝動のまま、白狼は駆け出していた。

野を駆ける、山を駆ける。ぬかるんだ土壌の上を、倒れた巨木の上を、土を蹴り岩を蹴り材木を蹴つて駆けに駆ける。体内に渦巻く衝動を、怒りを、悔しさを、情けなさを、払い吐き洗い流そうと、がむしゃらに脚を動かし続ける。ふと石に脚を取られ、泥濘の上に体を放り出す。それでもまた立ち上がり、拍子に口内に飛び込んだ土を吐き出して、白狼は再度走り出す。泥に塗れた毛皮に血が滲んでいた。雨に濡れ、ボロ雑巾のようになつたその姿を、今や誰もかつてのヌシとは思つまい。

感情に身を任せ、どれ程野山を駆けずりまわつただろうか。雨はいつの間にか上がつていた。嘘のような静寂が訪れていた。疲労に蝕まれた体を引き摺り、朧気な瞳を彷徨させていた白狼は、しじまの向こうに微かな泣き声を聞いた。

胡乱な顔をもたげ、重い脚を声の方角へと向ける。泥の色がする水たまりが跳ね、飛沫が毛皮に降り懸かる。されど、既にそのようなことを自覚する意識は残つていなかつた。

泣き声は、白狼の住処である祠から聞こえていた。
幻聴かと思つた。

されど、祠から出てきたオキナを見、白狼はその声が聞き違いではないことを悟つた。

オキナの細い腕の中には、小さな赤子の姿があつた。里人に預けられていた、数ヶ月前に生まれたばかりの嬰児だ。未だ自我を持たぬ赤子は、その存在を誇示するかの如く、肺を絞り上げるように声を張り上げていた。 いつの間にか涙が零れていたことを、白狼はようやく自覚した。

未だ重く雲が立ちこめる空に、白狼は咆哮した。残酷なまでの静謐に包まれたかつての里に、染みいるように遠吠えが響き渡る。濃灰色の雲間から僅かな光が差し、荒れ果てた里を、崩れた里山を、生かされた白狼と赤子を照らしている。遠く彼方まで響くような声は、人の言ひ嗚咽と酷似していた。

このとき、白狼は決意したのだ。

この最後の民のために、己の余生を捧げよつと。

それが、全てを失ったヌシに課された、生涯最後の役目だらうと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467z/>

土塊故郷行

2011年12月1日21時53分発行